

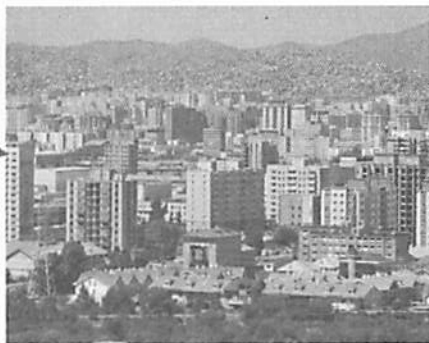
『トルゴイト地区の啓発活動』

トルガー・エネビシ（名古屋大学研究生）

皆さん、こんにちは。エネビシです。今年の四月から、名古屋大学で研究生として留学しています。今日は、私が日本に来るまでに、ウランバートル市のソングノハイルハン区トルゴイト地区という所で、地域住民と一緒にやってきた活動と、またこれからも進めていく活動について紹介したいと思います。

① モンゴルの首都ウランバートルの現状

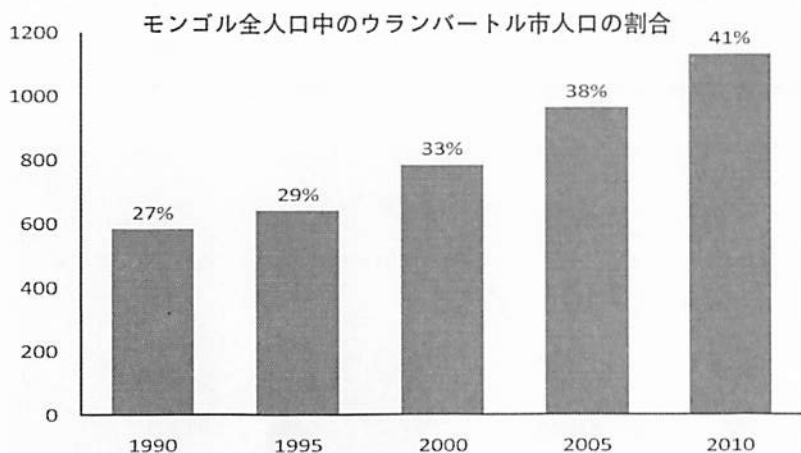
まず最初に、ウランバートルについて紹介したいと思います。モンゴルの首都ウランバートルは、一九九〇年以降、都市化がどんどん進んで人口も増えてきています。モンゴルはもともと遊牧社会だったのが、社会主義のときからだんだん都市化、定住化が進んできましたが、その中心の都市はウランバートルです。モンゴルの国土面積は一五六万六、五〇〇㎢なのですが、人口は二〇七万人。人口密度は世界でも一番少ないと言われています。しかし、モンゴルの国土面積は、日本の四倍と言われているのですが、こんな広い土地を持ちながら、首都ウラン



バートルには人口の半分が集中して暮らしているのが特徴です。

それで、一九二一年からはソ連主導の社会主義がモンゴルに適用されてきたのですが、実際に遊牧民が定住化して、首都ウランバートルをはじめ、二一の県があるのですが、県の中心地、さらに郡の中心地にと、定住化した生活が進んできたのは一九五〇年代です。それが、一九九〇年に市場経済に移ってからは、地方での暮らし、遊牧生活はほとんど苦しくなってくるということで、都会に移住する住民がさらに増えてきました。都会に地方から人が移住して暮らすことになると、大気汚染、土壌汚染、ごみ問題という大都市の問題が、次から次へと現われてきています。

ウランバートルの人口の増加を見てみると、一九九〇年代は、モンゴルの全人口の二七%を占める六十万人次だったのが、二〇一〇年には、全人口の四一%の一二〇万に増えました。その一二〇万人の人口の四〇%は、中央水道が通っているマンション地区に住んでいるのですが、六〇%はゲル地区に住んでいます。ゲル地区に住む人々は、木造やレ



原典：モンゴル統計局情報2010年

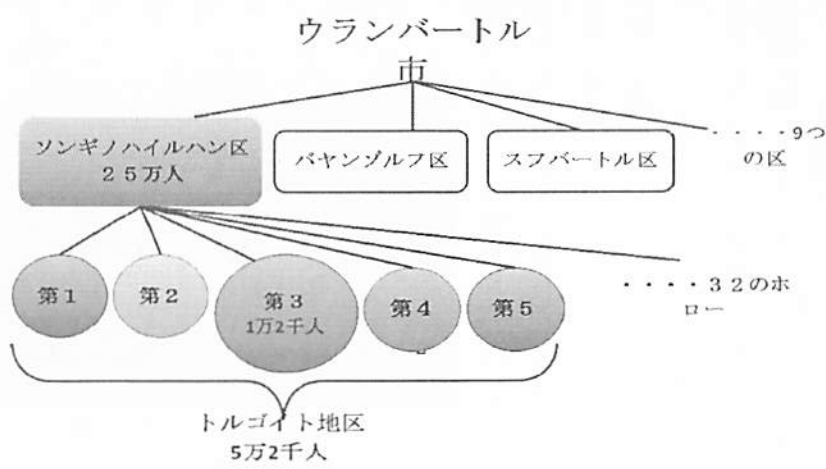
ソングの建物に住んでいて、伝統的な移動式のゲルにも住んでいます。二〇〇世帯ごとに一カ所の井戸があって、そこから水を汲んで、飲料水として使っています。中央水道が通ってないので、排水やトイレは穴を掘って、そこに排出しています。なので、春と夏になると、衛生も問題になります。

あと、一番最初の発表のときにも出ていたように暖房手段は石炭を燃やしています。なので、これもウランバートルの大気汚染の原因になっています。

② トルゴイト地区、第三ホローでの地域づくり活動の必要性

これから私が活動してきた地域の話に入りますが、その前にウランバートルの行政単位はどういう構造になっているかを、簡単に説明します。

ウランバートルは九つの区から成り立っていて、その中のソングノハイルハン区というのが一番人口が多くて、特に地方からの移住者が中心に住んでいます。そのソングノハイルハン区のさらに下にホローという、日本で言えば町という行政単位に分かれていくのですが、その中で、ソングノハイル



ハン区の下のホローの第一、第二、第三、第四、第五の五つのホローを含めてトルゴイト地区と言っています。このトルゴイト地区の人口は五万一、〇〇〇人で、トルゴイト地域づくりセンターは、第三ホローを中心に活動しています。第三ホローの人口は一万二、〇〇〇人です。私たちが活動し始めた二〇〇四年には八、〇〇〇人しかいなかったのが、この何年間で二万まで増えて、それが二つのホローに分かれることになりました。

このトルゴイト地域づくりセンターというのは、先ほど粟屋先生の話の中に出てきたジェンダーセンターというNGOが、二〇〇四年にソングノハイルハン区トルゴイト地区の第三ホロー

に設立させました。トルゴイト地域づくりセンターの主な活動の目的は、その地域に住む人々のニーズに合わせて、地域住民の自発性を生かして、一緒に地域づくりを進めていくことを目指しています。主な活動としては、特に活動先として選ばれた第三ホローとその周辺のホローには、モンゴルの西の方から移住してくる人々が多く住んでいて、最初のころは行政に登録されていないから、医療サービス・教育サービスを含めいろいろなサービスを受けなかったり、都会生活に慣れないから困ることがあったので、そういう人たちを支援していく活動から始まりました。移住した家庭の学校をドロップアウトした子どもたちに読み書きを教えるとか、公衆衛生の啓発活動などを、主に行っていました。また、地域住民のニーズや声を行政に届くような仕組みを作って、一緒に試みてきました。



トルゴイト地域開発センターのゲル事務所
(巻頭にカラー写真)

ゲル地区はさっき見せたように、アスファルトの道路がなくて、中央水道もないという状況で、春になると風で砂埃が起こったり、緑が少ないという、いろいろな環境問題の条件があるから、ゲル地区で木を植える、あとは、貧困生活をしている家庭は野菜作りをするという活動を、私は主に関わって担当してやってきました。

具体的にはその地域のシングルマザーのグループを作って、みんな共同で、ビニールハウスを建て、その中でキュウリを育ててみる。こういう野菜作りの活動を通して、地方から都会に住み始めて、一人ぼっちの人たちがお互いに助け合うことで、精神的に支えられることもできていました。

その次は、それぞれの家庭で野菜作り、木を植えるという活動も、もちろんいいのですが、地域ぐるみでみんなの目の見える所で活動を進めていけば、他の人もそれを見て、みんな一緒になってくれるんじゃないかというアイデアが上がってきたので、第三ホローの学校が位置している所、場所は地域住民がよく行ったり来たりしている、人がよく通る所で、地域の公園をつくることになりました。これも二〇〇八年から今まで何年間続けてやってきていることです。やはりモンゴルはもともと遊牧生活をしているから、自分から木を植える、公園をつくるというのが、意識的の中になく、自然の中で暮らしてきているから、これに関わる住民の意識啓発にもつながっています。



③ 住民の自発的な活動の始まり

こういふ活動を、トルゴイト地域づくりセンター、行政という、支援者の立場から地域住民を引っ張って、一緒にやってきたのですが、こういふ活動の中で、地域住民も自分から自発的な意識を持ち始めて、今年二〇一三年三月に、地域住民の十五人のメンバーで、エコグループがつくられました。このきっかけは、二〇〇七年から毎年第三ホローで、グリーンコミュニティというイベントを、五月の春になって暖かくなると、第三ホローで開いているのですが、そのときの習慣的なイベントに参加していた住民に、あるビデオを見せたんですね。そのビデオは、モンゴルがどんどん砂漠化しているその状況を描いているビデオだったので、木を植えなかったり、水を無駄遣いしたり、環境に対して危機感を持って対応していかないと、三十年後にウランバートルを含めてモンゴルはどんな状態になるかというのを、描いているビデオでした。それを見たときに、参加していた何人かの人がショックを受けて、これはやはり徹底的に私たちの方からも、環境保護活動に関わっていかなければいけないんだという声が出てきて、それでエコグループをつくって、こういふ話になって、つくられました。

エコグループは十五人の中で、今は女性十三人で、男性は二人です。



先ほど粟屋先生もおっしゃったように、ほとんど中年の人々が中心になってやっています。彼らの目的は、まず最初に私たちの住んでいる地域の環境問題は何かというのを、自分たちで学んで、理解して、その知識を受けて、それを他の住民たちに伝えていく。そういうふうには伝えていく上で、何かできるんじゃないかなというふうに、みんなで共同的に実践する。そういうことを目指してやっています。

去年エコグループがつくられてから、地域公園の管理などを担当してやったり、地域の他の住民たちに見せるために、みんなで同じ服で揃えたり、積極的にやりました。

それで、今年の八月八日から十二日まで、四日市市に研修に来ることになって、この研修を通して皆さんは、日本の環境改善、環境保護、環境教育活動をやっている所を見学させていただいたり、この四日市大学で、大気を簡単に測定する実験をしていただいたり、充実した研修を受けました。それで、研修を通して分かったのは、まず最初に地域環境問題の現状を把握して、それを分析して、それに合ったような対策を、地域のレベルで自分たちのできる範囲でやって行きましょうと。今まではトルゴイト地域づくりセンターや役場の所でいろいろなイベントを開いたり、セミナーを開いたり、そこに地域住民を誘うという感じで活動し



てきたのですが、今度は地域住民の所に足を運んで、家を回って、啓発活動や情報交換とか、皆さんの意見を聞いて、そこから何をやっていけばいいかを決めていきましようというヒントを受けました。

モンゴルはもともと遊牧社会で、遊牧民は夏はみんな集まって、川の近くに暮らしているのですが、冬は牧草地の草が少なくなるから、お互い離れて住みます。その場合は、外からお客さんが来るとよく歓迎するんです。新しい良い情報を受け取るんだとか、そういう精神を持っているから、いくら定住した都会生活をしていても、家に誰かが訪ねてくると、良いことだと考えるんですよね。このような特徴もあるから、これも使って、エコグループの十五人のメンバーは、それぞれ住んでいるストリート、一つのストリートに十〜十五の世帯が住んでいるから、それを担当して、月に一回その家を回って、情報提供していきます。まず最初に、私たちの住んでいる地域の環境はどうなっているか。冬になると大気汚染と言われるのですが、実際それはどんな状態になっているか。あとは、ごみ問題とか、自分たちを取り巻く状況をしっかり把握して、それをもって地域住民の所に情報提供に行きましようという話になりました。

それともう一つは、地域住民だけではいろいろ考えてやっても、行政からの支援がないと、長く続かないということで、行政の理解、お互いの理解も深めていく必要があるということが、この研修を通して分かりました。

研修を終えてモンゴルに帰ってから、今進めている活動です。大気の中の埃を測定する装置を頂いたのですが、それを使って、定期的に大気を測定すると、青空カードを使って、大気の状態を把握する。それをデータ化していくことをやっています。そしてエコ箱をつくって、その中に地域住民に

必要な情報やチラシなどの資料を入れて、これを持って月に一回、何人かのメンバーのチームをつくらせて、家を一軒一軒回っています。

十一月から二月は一番煙がひどくなるときなので、ストリートを歩いている子どもや大人に、マスクを配ることをやっています。又は、第三ホローにある井戸や泉の水質を測定することも、四日市大学の先生たちと一緒にやっています。これもまたデータ化しています。

研修には、第三ホローのホロー長も参加したのですが、ホロー長は地域の環境委員会という組織をつくって、委員会は地域の環境データに基づいて、これから地域レベルでどんな対策をしていくかを、みんなで議論して決めていくというシステムを、つくっていかうとしています。

以上です。ありがとうございます。

李

どうもありがとうございます。それでは、最後に、本学の柴田先生から、お話いただきます。

『三重県における男女共同参画』

柴田啓文（四日市大学経済学部准教授）

四日市大学経済学部の柴田です。どうぞよろしくお願いいたします。十分ぐらいということでお時間を頂きました。後でお話し合いというのがあって、そのお話の中で、私もぜひとも参加させていたいただきたいということで、それだったら話さないと許さないということなので、ちょっと話させていただきます。今、いろいろ聞かせていただいて、先ほど李先生が、私が話すまで帰るなということをおっしゃったのですが、私のゼミ生もだいぶ帰って。四時間目に授業のある学生もいるのですが、留学生は一カ月前ぐらいに言わないと、アルバイトが休めないとか、生活上の問題もありますので。ちょっと留学生のお話と関わりますので、留学生に触れました。

先ほどiPadを使おうと思ったのですが、ちょっとうまく動かないので、iPhoneに。ちょっと暗くなったりもするかもしれませんが。さて、世界地図に顔のマークが出ているのは、卒業生も含めて四日市大学の留学生の出身国です。南米だったら右がブラジルで、左がペルーです。細かくは申し上げませんが、アジアの多くの国から来ているということでございます。それで、今日、モンゴルのお話を私も大変楽しみにしております。これはウィキペディアから取っただけですが、基本的なデータとか私の今日の発表も、経済学部サイトのトップから、このままの画面で掲載しておりますので、またよろしければご覧ください。

今、留学生のお話をしましたが、アジアを中心に、ブラジル、ペルーの留学生がおります。特にア